

番 号	0640081			論文 報告	妖怪 異	幽 霊 その他
共通名	ヨミ		呼 称	ヨミ オニ, コウシン, ホウシ 鬼, 庚申, 法師		
出 典	書名・誌名 (3 巻 2 号 / 通巻 号) 郷土研究		執筆者 南方熊楠	発行年月日 (西暦) T4 年 4 月 1 日 (1915 年)		
	論文名 (31) 頁 ~ (35) 頁 一極めの言葉		話者 (引用文献)	発行所 郷土研究社		
	掲載箇所 (31) 頁 ~ (35) 頁					
地 域 名 (旧 名)	都・道 市 区・町 和歌山府・県 他 郡 村 () () () 都道府県コード 市町村コード					
特 徴	時代		出現季節・時刻			
	出現場所・方位		正体		音	
	色	大きさ	体験談・伝聞・昔話・伝説・神話・諺 その他			
童謡・わらべ歌に登場する鬼・庚申・法師など。 全国各地における、隠れん坊の鬼などを決めるときの歌。						

○一極めの言葉(三巻三七頁参照) 嬉遊笑覽卷六

下に云く、古今夷曲集に題不知、行安「小姫子の

隠れごにさへ難らぬは最早桂のは文字なるべし」。

風流徒然草に「其譯知れぬ事侍り、隠れん坊に難

らぬ者はちつちや子持や桂の葉とは子供の言ふ事

也」と有り。行安の狂歌も是を採れる也。(中略、

注の中に信田小太郎の淨瑠璃より、隠れん坊に難

らぬ者は、棟や辛夷や桂の葉、草履隠し肩車、足

の冷いちよこく走りてふ詞を引く。此戯れも一

極めて鬼となる者を定る事也。其時言ふ言は。江

戸にては「かくれんぼうに土用浪のかさつくれん

坊どつりやそつちへつんのきや」、(又づんくつ

のめの云々、中切りくちやむぢやが鬼よとも云

り)。出羽庄内にては、先づ幾人にも互に拳を握

り出して、是を順に數へる如くにいふ「隠れぼち

だてやなあなめちくりちんとはじきしまたのをけ

たのけ」、又「にぎりたぎりしよたぎりをけたのけ」

とも云り。又江戸にては「いちくたちく」と云事を

もする也。篋絨輪に「寵愛の餘り猪口迄をいとし

ばいちくたちくに毛だらけな腕」千雪。彼ち、や

子持も、此一極めと云事をするに云りし諺なるべ

し云々(以上笑聲の説)。いちくたちくの詞は中村君

の報告中にも出づ。昔し既に一極(いちきめ)て

ふ語有た上は、中村君が新たに假設した選擇の言

葉の代りに、専ら一極めの詞とか文句とか云ひた

い物だ。拙妻幼時毎も其祖母(二十五年前八十一

歳で逝く)に聞いた。田邊で隠れん坊の鬼を極る

詞「隠れん坊しやく、しはしめ食て、雀は稻食

て、チュツくく、大勢の中でお一人をようの

いた、お二人をようのいた、チャンくヌクく

お上り成れよ。唯今そんな詞を識る者少なくジャ

ン拳のみ用ゐるが、近郊神子濱では「ひにふにだ

あ、だらこまち、ちんがらこけこのどう」と算へ

番 号		論文 報告	妖怪 怪異	幽霊 その他
共通名	ヨミ	呼 称	オニ, コウシン, ホウシ 鬼, 庚申, 法師	
出 典	書名・誌名 (3 卷 2 号 / 通巻 号)	執筆者	発行年月日 (西暦)	
	郷土研究	南方熊楠	T4 年 4 月 1 日	
	論文名 (31) 頁 ~ (35) 頁	話者 (引用文献)	(1915 年)	
	一極めの言葉		発行所	
	掲載箇所 (31) 頁 ~ (35) 頁		郷土研究社	

(32)

一極めの言葉(南方)

る。守貞漫稿卷二十五にも、隠れん坊の鬼を定る詞、京坂「ひにふに達磨どんが夜も晝も赤い頭巾かづき通し申した」、江戸「ひにふに踏だる達磨が夜も晝も赤い頭巾かづき通した」と載す。又笑覽卷六下目隠しの戯の條に「福富草紙目無しども軒の雀と云り云々。賑草に今頃は彌生の半也、軒の雀逆、外の鳥よりは人近き者に侍れども、人を怕るゝ事少しも油断せず、此頃は常の如く早くは逃去す、家の内迄も入て餌を求む、子を養ひ侍る故也と有り、是れ軒の雀の義也」と見ゆ。中村君の記事の三に俵の鼠、右の田邊の舊詞にし、(熊野では今も鹿をしゝと呼ぶ處多し)や雀を擧げたのは、軒の雀と同例で、衆兒を是等の群棲禽獸と見立てたらしい。又田邊で「山の山」と云ふ兒戲は一兒鬼と成て立つた周圍を、子供多勢手を維いで廻り行き、一齊に「山の山の庚申さん、お鉄を擔げて磔掘りに、焼てたべる逆磔掘りに、其跡に誰が有

る」と唄ふ。

九六

十年斗り前迄、那智山邊で他人の所有地に入る者鉄を擔げ往き、地主に尤められたら磔掘を掘りに來たと云ひさへすれば其で済んだ。本文の詞に關係無いらしいが序に述べ置く。

唄ひ畢ると同時に一同歩を駐め環をしたまゝ、踞ると、鬼丁度自分の後に踞つた者の名を察し言ふ。言中れば宜しく、遂に言中てざれば頭や尻迄も搜つて言中てしむ。扱終に言中てた後、鬼立つて周圍の子供の頭を指し數へ乍ら「頭の皿は、幾皿六皿、七皿八皿、八皿むいてかぶらむいて、天に帆を懸け狐袋鯛袋、庚申さんの組板、やぐらは鬼よ」(上出江戸の「ぢやむぢやが鬼よ」參照)と唄ひ了る時、鬼の指に中つた兒が新らしい鬼と成るんだ。是よりも頗珍な事は、古來紀州諸方で満座の中で尻を放つた本人定かに知れぬ時、同じく一極めの法もて其砲手を露はす。其時唱ふる詞和歌山でも

番 号		論文 報告	妖怪 幽霊 怪異 その他
共通名	ヨミ	呼 称	ヨミ
			オニ、コウシン、ハウシ 鬼, 庚申, 法師
出 典	書名・誌名 (3 卷 2 号 / 通巻 号)	執筆者	発行年月日 (西暦)
	郷土研究	南方熊楠	74 年 4 月 1 日 (1915 年)
	論文名 (31) 頁 ~ (35) 頁	話者 (引用文献)	発行所
	掲載箇所 (31) 頁 ~ (35) 頁		郷土研究社

(33)

一極めの言葉(南方)

聞たが、忘れたから田邊のを陳べると斯うだ。「屁
放りへないば(尻に出来る腫物甚だ痛む)放つた方
へちやつと向けよ、猴の尻ぎんがりこ(豚脂の方
言)猫の尻灰塗れ、屁放つた子は、ごの子でゐる、
此子でゐる、誰に中つても怒り無し」。借ら案する
に、屁を放りながら黙り隠す奴は、天罰を受けて臀
腫るか、猴の尻の様に堅く成るか、猫の尻の如く
灰に塗るべしと脅す意ぢやらう。笑覽又云く「隠
れん坊とは異り乍ら芥隠し又草履隠し有り。何れ
も同じ仕方にて、一人尋る者に中りたるに隠せし
物を求め出さしむ。尋ぬる者を鬼と云ふ云々。甲
乙次第を定むるに草履を片々脱いで之を集め、空
に向ひて一度に投げ馬か牛かと問ひ、其伏仰を言
ふ也。例へば象棋の金か歩かと云ひ、碁の調か半
かとする事の如し」と。田邊では左様にせず。
鬼を定むるにやはり一極めの法有り。先づ幼児多
く圈を成し、一人中に立て兒共の履物を片々集め

列べ、一端より手又棒で敲き算へ唱へる言に「じ
ようりきじようまん、にたん處はおさごいごいよ、
剃刀買うて砥を買うて、子供の頭をぢよきぢよき
ぢよきつと剃つてやろ、な、やのきはとんぼ」、
(和歌山では「にたん處は」の代りに「おさ、にひつ
からげて」、「ぢよき」を「ぢよきつと」の代りに「ぞ
きぞきつと」、其他は全く同じ)。此詞畢る時敲れた
履物を其持主取りて穿く。幾度も斯うして一人の
履物片足のみ残る時、其持主隅に向つて眼を覆し
屈み居る間に、一同彼の片足を持去て隠し、還れ
ば其主探しに往く。一同は「きーぶいきぶい(殆
い)そこらあたりは味噌臭い」と呼び喚ぐ。扱彼
主其片足を見付け履還れば、群兒の圈中に立て新
たに戲を始め得れど、遂に探し出し能はずは知ら
ぬと聲立つる。然る時は一同往つて見出し呉れる
のだ。又紀州に「すい／＼車」ちう兒戲が有つた。
和歌山での作法は忘れて了つたが、田邊近郊神子

九七

番 号		論文 報告	妖怪 幽霊 怪異 その他
共通名	ヨミ	呼 称	ヨミ
			オニ, コウシン, ホウシ 鬼, 庚申, 法師
出 典	書名・誌名 (3 卷 2 号 / 通巻 号)	執筆者	発行年月日 (西暦)
	郷土研究	南方熊楠	丁卯年 9 月 1 日 (1915 年)
	論文名 (31) 頁 ~ (35) 頁	話者 (引用文献)	発行所
	一極めの言葉		郷土研究社
	掲載箇所 (31) 頁 ~ (35) 頁		

(24)

一極めの言葉(南方)

濱に残存する者を聞書すると、先づ小兒數人火鉢を圍んで各々其兩手を握り差出す。一人片手で順に敲きつゝ、すいゝ車の博多獨樂、からすめひつからげてあきぐるま、あき通ればドンドンドン」と唄ひ終る時、中つた子が鬼となる。さて諸兒兩手を袖や懷の内に隠し居るを、鬼探つて悉く兩手を掴み丁れば勝とす。諸兒掴まるまじと隠しまはる。鬼よりも多力なる兒の手は鬼輒く掴み得ざるを興するのぢや。

(附記) 右書き了つて後、田邊の町外れで今も行ふすいゝ車の一法を知得た。衆兒環り坐し、各々兩手を握つて拇指の側を天に小指の側を地に向け差出し居ると、其一人自分の右手もて自分の左手の天の側、次に地の側、其より順次に他の諸兒の手毎の天の側ばかり打ち廻り、自分の番に當る時のみ左手の兩側を打きて其兩手に代ふ。初め自分の左手の天の側を打くと同時に

九八

唄ひ出す詞に「すいゝ車の博多ごま、此手を合せて合すかポン」、ポンと云ふ同時に手を打かれた子は列を退く。打ち手「ポン」と同時に自身の左手の一侧を打けば其一侧を除き、其後他の一侧を打ち中つれば自分を除く。斯て幾度も唄ひ打ち廻れば、衆兒退きて打ち手の外一兒のみ残る。其一兒が鬼となり、一同の手を片端から搜り捕ふること前述に同じ。

是等と關係無いが作法が似た事故、又予一向書籍で見ぬ故、何かに出居るか質問を兼ねて記すのは、今は知らず三十年ばかり前迄、大阪和歌山等で宴席に行はれた「法師様」ちう戲だ。明治二十年頃予三島中洲先生の息桂氏と、米國ミシガン州立農學校の寄宿舎で、密にホイスキーを購うて彼邦生れの學生と此戲を催し、其より大事件を惹起して衆人の身代りに予一人雪を踏んで脱走したのが一生浪人暮しをする事の起りで、國元へ知れたら父母

番 号		論文 報告	妖怪 幽霊 怪異 その他
共通名	ヨミ	呼 称	ヨミ オニ、コウシン、ハウシ 鬼, 庚申, 法師
出 典	書名・誌名 (3 卷 2 号 / 通巻 号) 郷土研究 論文名 (31) 頁 ~ (35) 頁 一極めの言葉 掲載箇所 (31) 頁 ~ (35) 頁	執筆者 南方熊楠 話者 (引用文献)	発行年月日 (西暦) T4 年 6 月 1 日 (1915 年) 発行所 郷土研究社

(35)

沽却売のこゝ(高橋)

は嘘や歎かんと心配したが幸ひに雙乍ら知らずに
終られた。三菱創立の元勳故石川六左衛門氏の息
で仙石貢君の夫人の弟保馬と云人のみ其状を親し
く賭たのだが、非常に沈黙な君子で、六年後龍動
で三四十日同棲飲遊したが、遂に一言も此事に及
ばなんだは今に感佩し居る。今も健在なら讀者中
に知人も多からうから情願御禮を述べて欲しい。と
序言が長いが彼遊戯は左迄六かしからず。酒客多
人環り坐り、其一人手拭で眼を縛り居ると、他の
一人が環の真中に居て「法師様え、法師様え、ど
こへ盆さーしましよ」と唄ひ、扱こゝかこゝかと
唱へ乍ら思ひ付次第に人々を指す。假の盲法師「ま
だく」と云へば、人を指更へ、「そこちや」と云
へば指れた人が飲まねばならぬ。飲了つて手拭を
受け新たに法師と成る事前の如し。拙妻言ふには、
田邊に行はれた「べろく」の神様」と云ふ戯、趣は
同じく作法稍差ふ。環中の一人が扇杯長い物を

両手に挟み、鼓(方言べろく太鼓)の如く振舞し
て「べろく」の神様は、正直な神様でおさゝの方
え面向る、面向る」と唄ひ了ると、同時に環坐す
る一人を指し誰人と問ふ、環坐せる一人眼を覆せ
る者、指れた人の名を言中れば、中りし者一盃吞
み代りて眼を覆すと。此戯はもと何と名付られた
か大方の教を俟つ。(南方熊楠)